

曉水鶏

東久世通禧

賤の男のかげまだ見へぬさ苗田の

ありわけ月夜水鶏なくらん

水野忠敬

ありわけの月は残れるねやの戸に

夢おどろかし水鶏なくなり

増山正治

わけつぐる八聲の鶏をきかぬまに

何思ひてかたゝくくひなぞ

諏訪忠元

挿櫛のわかつきがたになりぬとや

門を水鶏のたゝくなるらん

相澤朧

挿櫛のわかつきおきのすゝしさに

水鶏の聲も身にぞしみぬる

矢田猪平

夢をさへ結ぶまもなさみじかよに

わかつきかけて水鶏なくなり

大橋文之

短夜もはやわけんとすしぼの戸を

わけよと叩く水鶏なるらん

西升子

涼しさを袖におぼゆるねやの戸の

おしわけ方に水鶏なくなり

増山三雪子

さめやらぬねやの枕のわかつきに

おどろかしても鳴く水鶏哉

頭本春子

いとゞしく叩く水鶏にかき出て、

見れば門田も白みそめけり

久保花子

川水のながれのすゑもほの見えて

ありわけ月に水鶏なくなり

柴生田たつ子

有明のつきかけきよきさと川に

明るもしらすで水鶏なくなり

大竹伊勢子

夜は明ぬとく明よとて門の戸を

水鶏はいたく叩くなるらん

印 東 昌 綱

ともし火のはかげも白む明方に

水鶏の聲ぞちかくきこゆる

佐々木信綱

うばらさく里の垣根も見初めて

明行く小田に水鶏なくなり

鈴 虫

ろ す い

燈火消え、坪にもたらぬ中庭に、たゞずめりけり、
下宿の下婢、田舎育ちのいやしき風情にも、何や
ら、ものおもひげなりけり、

「なにしてや

「山里ならぬ都の住ひ、夏のあつさをすいむし

の、こゝにも聲の、聞ゆるぞかし

「鈴虫の聲、何とさくや

「うらめしく

「なごてうらめしくは

「田舎の事、思ひ出して

「田舎といふは

「君、知り玉はずや、甲州、あの、吉田の里を

……

「吉田に父ありや

「否なとよ、五年むかしに

「愛の母ありや

「去年の霜月、あえなくも……

「さあらは誰を……戀しとてにや……可愛

の夫を……

「オホ、ツ

と笑ひて、厠の蔭に、姿かくしきさ、